

## 第三部 野良猫の去勢・不妊 (ケート・ホーン博士の講演から)

エリザベス・オリバー

ニュースレター31号、32号に引き続き、昨年5月にスロバキアのブラチスラバで開かれた国際コンパニオンアニマル会議について報告します。



■ 本各地の都市部で大きな問題になっている苦情のひとつに、野良猫の増殖があります。野良猫は、はじめから野生なのではなく、無責任にも最初に猫を捨てる人達がいることから発生するのです。捨て猫の大部分は不妊手術をしていないので、またたく間に子供を産み、子孫が繁殖して猫の数を急増させることになります。とりわけ、人々が餌を与えると、こういう猫集団がふえていきます。猫集団の多くは伝染病に汚染されており、病気が群れ全体に広がって多数の猫を殺すことになるのです。たとえ、一時その数が減少しても、新たに猫が捨てられると、また悪循環が始まり、野良猫は増え続ける人は去勢・不妊手術をする責任をもつべきです。日本には、野良猫を捕まえて不妊手術をするボランティアがいます。野良猫に不妊手術をするのは、猫を救うだけでなく、人々にも安全な環境をつくるのに役立ちます。しかし、野良猫は自分の命を自分で守る能力が低い動物です。一度に多くの子猫を産み、育てる能力が低いからです。子猫は生後5週間までに繁殖期に入ると妊娠する可能性があります。従って、子猫にできるだけ早く不妊手術を施すことが望ましいのです。昨年秋のニュースレター31号で、去勢・不妊手術をコントロールするために早期去勢・不妊することの重要性を強調しましたが、野良猫の数を減らす計画を成功させるには、複数の獣医師の協力が欠かせません。安い費用で手術を受けられるだけでなく、若い動物に進んで不妊手術を施そうとする獣医師たちの熱意も不可欠なのです。

ホーン博士はロンドンの野良猫に不妊手術をする計画の先駆者で、自らの会をSNIIP（イズリントン・猫に不妊手術をする国際ネットワーク）と名づけました。SNIIPはロンドン域をイギリスの他の都市に広げ、外国でも野良猫に去勢・不妊手術をする計画を進めようと、現在はSNIIPインターナシ

ナルを設立しました。SNIIPは過密なロンドンのイズリントン区で1匹の猫から始まった運動です。この三毛猫はホーン博士のオフィスの外に住んでいて、子猫を産み続け、彼らは成長すると半ば野生化しました。ついには、RSPCA（王立動物虐待防止協会）に連れ去られ、安楽死処分されたのです。殺すよりも、猫を捕えて不妊手術をした方が親切だという友人の提言を受けて、親猫は手術を受けました。後にその猫はもとの所に戻されて、そこで長年幸せに暮らしました。ホーン博士は、この経験から、猫を捕えて去勢・不妊手術をし、もとの所に戻るのが最

うな病気や傷の見つかった猫は安楽死させます。なつきやすい猫や小さな子猫はよその家に貰われていくことも多いのですが、残りの成猫はもとの場所に戻して解放します。これらの猫には、麻酔をかけて左耳の先端を切断しますが、これは解放後に同じ猫を再び捕えることのないように目印にするのです。もしも、もとの場所があまりにも危険だったり不適切な場合には、



## 第二回国際コンパニオンアニマル福祉会議

1998年5月ブラチスラバ

も情け深い方法だと悟ったのです。SNIIPは公認の慈善団体で、大勢の動物愛好家に支えられ、彼らによって資金が集まっています。その組織は完全にボランティアによって運営されています。有給のスタッフは1人もいません。猫を飼育する施設も備えていません。猫は去勢・不妊手術を受けた後、しばらくボランティアの家庭で飼われ、回復すると解放されます。生命にかかわるよ

うな田舎のファーム・サンクチュアリ（動物保護農場）に連れて行って、農場に慣れさせるために数週間囲いの中に入れ、その後農場に放します。そこでは餌は与えられますが、野生に近い生活を送ることができるのです。

ホーン博士は、野良猫に去勢・不妊手術をする計画をうまく進めるには、次のような条件が不可欠だと指摘しています。

- \* 信頼できるボランティアの拠点があること。
- \* 管理体制が確立がしっかりして

いること。

ホーン博士は、安く不妊手術をするためには、獣医師の協力を得る必要があります。ロンドンで雌猫の不妊手術代として、SNIIPが支払う費用はとても高く、平均して20ポンド（約4000円）をします。東ヨーロッパ諸国では、その半分ですみます。

- \* ボランティアが自宅の部屋を提供して、手術後の猫が回復するまで世話をしてくれること。

- \* 猫を捕えたり、運搬するための特別なケージなど、必要な設備をもつこと。

- \* 資金力があること。

- \* 地方行政当局、及び、ボランティアたちとうまく連携を保つこと。